
ファンタジーアース異聞 ～凍風のレイジュ～

風花 紫綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーアース異聞 ～凍風のレイジュ～

【Nコード】

N5868L

【作者名】

風花 紫綺

【あらすじ】

（この話は、MMORPG「ファンタジーアース ゼロ」の2次小説ですが、ゲームを知らない方も読めるよう書いています）

新米氷皿レイジュは、あまり戦場に出ようとしなかった。知り合いに誘われつつ戦っているものの、普段の彼女の行動には謎が多かった。

プロローグ（前書き）

これは、大規模MMORPG「ファンタジーアースゼロ」の二次創作小説です。

そのため、ゲーム内の専門用語が多々出てきます。なるべく逐一説明するよう心がけますが、話の流れの都合上説明を入れられない箇所は、その話の最後に説明をつけるようにします。

また、この小説はゲームをやっている人視点の小説ではなく、舞台となる世界「メルファリア」で戦う1PCの視点で進めていきます。

そのため、実際のゲームにはない設定・用語などが出てきたり、都合よく改変したりすることがあります。

実際に「ファンタジーアースゼロ」を知っている方も知らない方も読めるようなものにしようとしていますので、「ここは変」とか「ここわかりにくい」といったことは、コメントで言っただけだと嬉しいですよ。

では、前書きが長くなりましたが、「ファンタジーアース異聞
凍風のレイジュ」をどうぞ！

プロローグ

青く晴れ渡る空を、茫洋とした瞳で眺める少女がいた。

真新しいインディゴブルーの服に身を包み、あまり手に馴染んでいないような杖を握って、どこか疲れたように立ち尽くしている。

「あー…終わった終わった。これで『センソウ』行けるんだよねえ…」

まあ、ほどほどに頑張りますか、と小声で呟いて、彼女は首都の中最初の1歩を踏み出す。

彼女の名は、レイジュ・カナン。チュートリアルを終えたばかりのLv16。

氷属性の魔術を操るソーサラー…通称『氷皿』だ。

メルファリアーそこは、クリスタルによって創造された世界。かつて、はじまりの王マルクス・エッセティアの統べるエッセティア王国により、平和の内に治められていた。

しかし、クリスタルの加護の元発展した人類は、やがて野望を抱き始める。

やがて起こった、世界を包む争い。長きに渡って世界を治めたエッセティア王国の滅び…それから、幾星霜。

いくつもの時代を経て、今また争いの炎が世界を包んでいた。

大陸の統治を目指す、5人の王、5つの国。

獣人王ネツアワル・ヒュンケルの治めるネツアワル王国。

賢人王ナイアス・エルソードの治めるエルソード王国。

姫將軍ワドリーテ・ベルクシュタイン・ホルデインの治めるホルデイン王国。

自由帝ライル・ク・ベルタ・ゲブランドの治めるゲブランド帝国。
聖女王ティファリスの治めるカセドリア連合王国。

それぞれの思惑の元戦いは続く。それは、終わらない戦いなのかもしれない。

その戦火に身を投じる兵士たちもまた、様々な思惑を抱えて剣をとる。

これは、そんな一人の少女の話。歴史に埋もれ行く1兵士の、その戦いの記録……

若葉編 1 世話焼きな先輩（前書き）

（※）で示したことに關しては、あとがきに説明を載せてあります。

若葉編1 世話焼きな先輩

とりあえず町中を歩き回ってはいるものの、レイジュは無表情のまま困っていた。

(外に出れないのだけど…)

町の四方を固める壁。門はあるものの門番はなく、門は一人で押して開くような大きさのものではない。

小さくため息をついて門を見上げていると、後ろから聞き覚えのない声がかかった。

「あら？ ひょっとして新人さん？」

ぴくりと体を震わせて、恐る恐る振り返る。

「大体ここに来たばかりの人って、町から出られなくて迷うのよねー」 (※1)

明るい声で言いながらにこにこ笑う彼女は、露出の多い服装に杖を携えている。同じソーサラーのようだが、随分と経験を積んでいそうだ。レイジュはそう思った。

しかし・・・例え経験を積んでいようが仮に偉い人であろうが、これだけは言わせてほしい。

「それなら道案内くらい用意しておいて頂きたいのです…」

小声で言っただけのそれは相手にもすっかり聞こえていたらしく、その直後の彼女の大爆笑を聞いて、レイジュは唇を「へ」の字に曲げるのだった。

彼女・・・名をフィオレシア・リルムというそうだ。フィーと呼んでくれと言われた・・・に連れられて町の外に出て、歩くことしばし。「何かの縁だし、戦争の基礎を教えてあげる」と言われ、そのままフィーに連れられて、レイジュは戦場へとやってきた。

「人集まってるでしょ。ここは他国の領土だから、あたし達が攻め込む訳なんだけどね、まず攻め込むためには、あたし達攻撃側の拠

点となる場所、キープを作らなきゃいけないの」

言われて辺りを見渡せば、なるほど確かに続々と人が集まっている。

「そして、これが防衛側の拠点、キャッスル。ここから一定距離以上離れないと、キープは作れない」

フィーは背後の城を指差して言う。と、唐突にその場に音が鳴り響いた。

「誰かがキープ建てたみたいね。これで、攻撃側が5人以上参戦表明すれば、ここは戦場になる、ってわけ」 (※2)

と、ふと思いついたようにフィーはレイジュを見つめる。

「そういえば、キープリンククリスタルはもらった？」 (※3)
レイジュは小さく頷いて、服の襟に付けた小さなクリスタルを示す。

「よかった。それないと、戦場で『死亡状態』になったときに本当に死んじゃうから、失くさないように気をつけてね」

真剣な顔でそう言われて、レイジュは頷きを返す。

志願して一番最初にもらったのが、この小さなクリスタルだ。

長年続く戦争において、無駄な戦死者を増やさないために作られたのが、この『キープリンク』という魔法だという。

戦場で負った怪我や、時には致死のダメージは、この小さなクリスタルを通して拠点となる城に与えられる。例えば死を免れない傷を負ったとしても、すぐに城に運ばれ、傷は跡形もなく癒えるのだとか。

「さて、キープも出来たみたいだし、あっちまで走りますか」

そう言ってフィーは走り出す。が、すぐに足を止めて振り返った。その場から動かぬレイジュを見て、不思議そうに首をかしげる。

「レイジュちゃん？」

「…今、行きます」

そうしてやっど動き出したレイジュ。その存在を背後に感じながら、フィーは再び走り出す。

先ほど、レイジュの唇が微かに動いたような気がしたが…何を言っていたのかは、聞き取れなかった。

「これが『戦争』ですって…？ 馬鹿馬鹿しい」

キープリンクリスタルを指先で弾きながら言ったその言葉は、誰にも届かずに消えた。

若葉編1 世話焼きな先輩（後書き）

※1 このゲームで、町やフィールドから出るためにはBackspaceキーを押すが、始めたばかりの人はそれに気付かず、町の端で門に体当たりをすることがある。

最近はチュートリアル最後に説明がされるようになった。

※2 ほぼゲーム内のシステムそのまま。

1フィールドに攻撃側PCが5人以上いるとき、5人以上の同意があれば、そのフィールドに攻撃側の拠点『キープ』を建てる事が出来る。

※3 オリジナル設定。

実際のゲーム内では、HPが0になった場合、数秒後自動的に自軍の拠点に送られ、HPがMaxの状態で復活する。

小説化に当たって、なるべく近い雰囲気になるようにしてみました。

余談ですが、レイジュの外見はゲーム内と言うところの体型小柄、7顔赤瞳、4髪銀髪。フィーは体型グラマー、4顔青瞳、7髪金褐色をイメージしています。

若葉編2 はじめての戦争 裏方編

戦争が始まる前は、なんとも慌しい。

「えっと、ハイリジエよし、ハイパワーよし、エンチャは…あー、今回は裏方だし、フルじゃなくていいかなあ。一応ガードとアタックと…パワーリジエも付けときますか」

ぶつぶつ言いながら手持ちのアイテムをチェックするフィー。その手元を覗き込みながら、レイジユは物言いたげにしていた。と、それを悟ったか、フィーは手元にある薬の瓶と色とりどりの石を並べる。

「ええとね、このオレンジ色の薬がハイリジエネレート、体力回復用ね。で、この青いのがハイパワーポット、パワー回復用。これは持続性のある奴なんだけど、瞬間的に体力回復するのもあるよ。パントカレアステークとかね。

で、こっちの石がエンチャント用ジェムクリスタル。エンチャントって言うのは…」

そこで一旦言葉を止めると、フィーは自らの杖を示した。

「ここに窪みがあるでしょ？ここに填めて使うの。例えば、この赤いのは攻性を上げてくれるし、こっちの青いのは耐性を上げてくれるわ」

そう言って、5つ空いた穴のうち3つに石を填めていく。青と赤、それに水色の石だ。

「で、水色はパワー回復を助けてくれる。今回は付けてないけど、こっちの緑色は体力を上げてくれるので、水色不透明なのはパワーを上げてくれる奴。前線出るなら、付けとかないと痛い目見るわよ」

(※1)

そう言って朗らかに笑うと、再びそれらをカバンにしまいこんだ。「さて、そろそろ始まるわね」

一瞬の静寂。そして、遠く響いた音を合図に、戦場に集った50

人が走り出した。

戦争は、基本50対50で行う。時間制限があり、その間に相手の城を落としたほうが勝ち。その土地の支配権を得る。時間内にどちらの城も落とせなければ、防衛側の勝利となる。

戦場についての役割は様々。前線に出て戦うもの、領域を広げるために建築を行うもの、歩兵にはない力を持つものを召喚するもの、そして、それらを支える物資『クリスタル』を採掘するもの。大きく分ければその4つである。

ある程度経験を積まなければ、強い力を持つ術や技を使うことはできない。また、武器や防具も性能のいいものを身に着けるには、ある程度の実績が必要となってくる。

しかし、召喚には個人の経験は関係がない。

「だから、まずは裏方としてクリスタル採掘と召喚を行うといいわよ。そして、慣れてきたら建築にも挑戦してみましょ。効率のいい建て方とかもあるから、見て覚えるといいわ…つと、クリスタル貰うわね、オベリスク建ててくるわ」 (※2)

キープから遠く離れた大クリスタルの傍で、クリスタルを採掘しながらファイアは一つ一つ説明していく。その合間にレイジユからクリスタルを受け取り、15個溜まればそれを持って走る。

キープリンククリスタルから聞こえるファイアの声。場所とオベリスクを建てる旨を全軍に通達する。

これもまた、キープリンクの魔法の効果だという。なんとも便利なことだ。 (※3)

そしてまたレイジユはクリスタルを掘る。と

『危ない！ ハイドいるわよ！』

唐突に響くファイアの声。それに顔を上げた、その瞬間

「あ…っ」

手に痺れるような衝撃が走る。思わず取り落とした杖がその場に転がった。

続く一閃をかううじてかわすも、続いて撒かれた黒い粉のようなものが目に入って、何も見えない。

と、誰かに手を引っ張られる感覚がした。

「こっちに！ ……逃がさないわよ、アイスジャベリン！」

何かが凍りつくような音、それに続く殴打の音、剣が風を切り裂く鋭い音が連続して続き…

「ライトニング！ ……もう一回ライトニング！」

そして、音が途切れる。ようやく戻り始めた視界には、盾を構えた男性と、倒れ伏す短剣使いのスカウト。スカウトの姿はやがて薄れて行き…ふと、消えた。 (※4)

「ふう…大丈夫だった？」

レイジュは呆然としながら頷くと、取り落とした杖を拾い上げる。「今のは…？」

「ああ、敵側のスカウトが妨害に来てたのよ。姿が見えなかったでしょ？ あれはハイドって言って、スカウトのスキル。よく見れば見つけられるんだけどね。」

最初に食らったのはアームブレイク、その後は多分パワーブレイク振ったのかな？ 避けてたけど…で、その後目が見えなくなったでしょ？ それがヴォイドダークネス」

それぞれ通称、アムブレ・パワブレ・ヴォイドって言うの、と、付け足して、フィーは再びクリスタルの傍に座る。

「スカウトは、あたし達ソーサラーにとって最も苦手とする相手だからね。周りを良く見て、ハイドからの襲撃に警戒すること、これ基本ね！」 (※5)

レイジュはこくりと頷いて、フィーの隣でクリスタル採掘を再開する。

先ほどの襲撃に対応した盾をもった剣士もクリスタルの周囲に座っていた。

クリスタルの放つ青白い光を浴びて、先ほどの傷がゆっくり癒えていくのを不思議そうに見ながら、レイジュは先ほど短剣スカウトが倒れていた場所を見つめる。

もはやその影すらも見えぬ地面は、襲撃前と何も変わらず、そこに存在していた。

若葉編2 はじめての戦争 裏方編（後書き）

※1 ハイリジエⅡハイリジエネレート 4秒ごとにHPを48
ずつ回復

ハイパワーⅡハイパワーポット 4秒ごとにパワーを15
ずつ回復

上二つは、もっと効果の弱いものあり。

攻性Ⅱ攻撃力 耐性Ⅱ防御力

パワーⅡマジックポイントのようなもの。基本スキル以外
は、パワーを消費してスキルを発動する。

攻性を上げるエンチャントⅡフィズアタックゲイン

耐性を上げるエンチャントⅡフィズガードゲイン

パワーの自然回復量を増やすエンチャントⅡパワーリジエネ

HPの上限を上げるエンチャントⅡHPアップ

パワーの上限を上げるエンチャントⅡPWアップ

※2 領域を増やすことで、相手に「領域ダメージ」というもの
を与えられる。（これが、相手に与えるダメージの7割を占める。
そのため、領域が広いほうが有利）

領域を増やすための建築物がオベリスクとエクリプス。オ
ベリスクのほうが支配範囲が広いが、壊されたときのダメージも大
きい。

オベリスクはクリスタル15個、エクリプスはクリスタル
11個が必要。

※3 オリジナル設定。チャットの代わり。

実際のゲームにおいては、フィールド全体に聞こえる「全
体チャット」、自軍全体に聞こえる「軍団チャット」、一定範囲内
の自軍のみに聞こえる「軍範チャット」、自軍敵軍問わず一定範囲

内に聞こえる「範囲チャット」、同じ部隊内に聞こえる「部隊チャット」、同じパーティ内に聞こえる「パーティチャット」がある。

※4 一応、ジャベ↓バツシュ↓ブレイズ通常連打↓ライト↓ライトのつもり。

※5 敵のハイドスカウトの姿は見えないが、攻撃のカーソルが合うと色が変わるので発見できる。ハイドを発見するためにカーソルをぐるぐると動かすことを「ハイドサーチ」という。

F E Zには現在5つの職があり、そのうち初期からある3職、ウォリアー・ソーサラー・スカウトの間には3すくみの関係が存在している。

ソーサラーはウォリアーに強く、スカウトに弱い。

若葉編3 はじめての戦争 召喚編（前書き）

注）7／4 あとがきのクリスタル採掘個数について修正を加えました

若葉編3 はじめての戦争 召喚編

「さて、オベリスク展開も一通り終わったし…」

両手に一杯抱えたクリスタルを持ったまま、フィーは立ち上がった。

「掘ってばかりも退屈でしょ。次はナイト召喚、行ってみる？」

言うなり走り出すフィーに、レイジュは呆れたようにため息をつく。

「慌しい人…」

つつい漏らした一言に、横で採掘していた片手剣士がこらえ切れないと笑いを漏らした。

レイジュが視線を向けると、口元を押さえて笑い続ける彼。

「悪い…」

まだ笑いを含んだ声で言ってくる彼は、うつすらと目元ににじんだ涙をぬぐうと、一呼吸で息を整える。

「まあ、何事も経験だ。あんた初心者だろ？ やってみろよ。ついでにこれも持ってきた」

そう言って、採掘したクリスタルを渡してくる。軽く頭を下げて礼をすると、走り去ってしまったフィーの背を捜す。

「ナイト召喚なら、行き先はキープだよ」

辺りを見回すレイジュの背に、再び彼の声がかかる。木々の合間にちらりと見えるキープを指差され、レイジュはクリスタルを抱えなおして言った。

「えと…ありがとうございます」

「いいってことよ。ま、頑張ってきた」

手を振って送り出され、レイジュはキープ目指して走り始めるのだった。

「レイジュちゃん、遅いよ…って、ああ、クリスタル貰ってたのね」

キープ前にいたファイは、レイジュの手の内にある大量のクリスタルに、納得したように頷いた。

「今、いくつクリスタルある？」

「25個…ですね」

目でざっとクリスタルを数えて答えると、ファイはその上に更に5つクリスタルを乗せた。

「よし、これで30個ね。あたしは…あと15個かな？　ちょっと待ってて」

キープの目の前にあるクリスタルの元へ走るファイ。

「『なくなりばあと15おお！』」（※1）

キープリンククリスタルと2重になって聞こえる声。すぐに戻ってきたファイの腕には、同じく30個のクリスタルがあった。（

※2）

「よし、準備完了！」

簡単に説明するわね。ナイトは召喚の基本！クリスタル30個を引き換えに、キープから召喚されるんだけど…まあ、なってみたほうがいいわね。軍の皆に、ナイトを召喚したことを報告するのを忘れない様に！」

いくよー、と言って、ファイはキープを見つめる。その手の内のクリスタルが強い輝きを発した、その瞬間…

そこにファイの姿はなかった。いたのは、赤い甲冑に身を包み馬に跨る、騎馬槍^{ランス}を携えた騎士。

『ナイト、行くよー！　…これが召喚ね』

少しくぐもった声は、確かにファイのもの。レイジュは目を瞬かせながら、ナイトへと変じたファイを見つめた。

『簡単よー、クリスタル持ってキープ見て、『ナイトに』って思うだけ』

さあやってみよう！　と軽く言われて、レイジュは半信半疑でキープを見た。

（…ナイトに）

そう思った瞬間、クリスタルが光を発した。

『……う、わ……』

呟く声がどこかに反響するようにくぐもっている。視線がいつもより随分高い。

『ほらほら、出撃の報告!』

『あ、はい……えと、ナイト、出撃します……』

『さて、前線行くわよ! ナイトについては、走りながら説明するわ』

颯爽と駆け出したフィーの後を追って、レイジュも馬を駆る。何か、体に染み付いたように滑らかに馬を駆ることが出来た。

ナイト、それは防御の要となる召喚。歩兵に対してはまともにダメージを与えることは出来ない。その真価は他の召喚と相對したときに発揮される。その対召喚攻撃力故に、ナイトは自軍の召喚の護衛や、敵召喚の撃破を主任務とする。

また、その俊足を生かし、僻地で採掘されたクリスタルをキープへ届ける『輸送ナイト』、キープから遠く離れた場所へ迅速にオペリスクを建てに行く『建築ナイト』、敵のキープ付近を見張り、敵召喚の出現をいち早く報告する『警戒ナイト』といった役割もある。

(※3)

『今回は、自軍のレイス護衛が主な目的。敵のレイス撃破が次の目的ね。ついでだから、戦場の様子も見てみるといいわよ。細かいテクニクとかは……見て覚えて!』

馬上から軽くずり落ちたレイジュを尻目に、フィーはぱたぱたと手を振る。

『大丈夫大丈夫! いざ死にそうになったら、ナイト解除って思えばすぐに解除できるから! あ、解除したり、死んじやった後にも、報告忘れないでね』

そして、ファイはしっかりと騎馬槍^{ランス}を握りなおす。
大勢の人の声。響く爆音。
前線は、すぐそこまで迫っていた。

若葉編3 はじめての戦争 召喚編（後書き）

※1 なくりぼⅡ「ナイト用クリスタル募集」の略。実際のゲームでは、こういった略語が多々使われる。

※2 キープに最も近いクリスタル（通称キプクリ）には、クリスタルを回収し、必要に応じて配布する人、通称クリスタル銀行（クリ銀）がいることがある。

一人で掘れるクリスタルの量には限りがある。

Lv1～10では最大10個、Lv11～19ではLvと同じ個数、Lv20～35では最大20個、Lv36～40ではLv－15個（つまりはLv40で最大25個）

12個以上は掘るために掛かる時間が延びる。

トレードでクリスタルを集める時、一人で持てるクリスタルの数は最大50個。

クリスタル銀行にクリスタルを集めておけば、召喚がスムーズに行える。

※3 召喚は5種類存在する。

召喚に強いナイト、建築物に強いジャイアント、歩兵に強いレイス。

強力な対歩兵能力を持ち、相手のキープに直接大ダメージを与えることが出来るキマイラ。

自軍劣勢時に死亡したとき、低確率で召喚されるドラゴン。

若葉編 4 はじめての戦争 前線編

フィーの駆る馬は速度を緩めることなく、一直線に戦場に向かっていく。

『とりあえず、基本は大ランスには大ランス、小ランスには小ランス。後出し有利、今回はレイス護衛が最優先。敵のナイトに釣られない！ 体力危なくなったら即逃げる！ 無駄に死なない！ 以上！』 (※1)

『と、言われましても…』

戦場が目前に迫る。後に続くレイジュは小さく言うが、フィーは既に戦場に踊りこんでいた。

『さあ、いっくわよー！』

くぐもった声で小さく溜息をつくとき、レイジュは馬の首を自軍のレイスのほうに向けた。

『まあ…初戦くらいはがんばろうか、ほどほどに』
ぽつりと呟いて、レイジュも戦場へ身を投じた。

(これは、なかなか…)

声を出す暇すらなく、めまぐるしく変わっていく戦場の中、レイジュは半ば混乱しながらも、必死で馬を駆っていた。

隙の小さい小ランスには、可能な限り小ランスを当てるように。隙の大きな大ランスを見逃さず、その隙に大ランスを。

基本に忠実に、戦場を見ながら動いていた…つもりだった。

それは、突然だった。

何か、硬いもので殴られた。くらりと視界が歪み、動くことすらままならなくなる。いくら焦っても、体は言うことを聞いてくれず…その隙を見逃すほど、相手は甘くはなかった。

迫る巨大な剣、微妙にタイミングをずらして放たれる、大ランス

の嵐…一瞬走ったのは、体を貫かれるような激痛。そして、遠のく意識…。

次に気がついたとき、レイジュはキープの前に立っていた。

『あー…今のはちょっと、運が悪かったわね』

キープリンククリスタルから聞こえてくるのは、戦場の雑音の混じったフィーの声。

『バッシュ食らっちゃったのね。あれは死ぬるわ』 (※2)

レイジュは、思わず自らの体をまじまじと見る。そこには傷ひとつない。服にすら、傷跡はなかった。

しかし、まざまざと思い出せる。体を貫いていった痛みを。遠のく意識の片隅で、地面に叩きつけられた感覚を…

(あれが、『死ぬ』ということ…)

無意識に、体に震えが走る。

『レイジュちゃん？』

「え…ああ、すみません。ちょっと、唐突過ぎて理解が…」

『まあ、最初はそんなものよ。すぐに慣れるわ！ 最初にしたら上出来、上出来！ …じゃあ、あたしはもうしばらくこっちにいます。ナイト死亡の報告したら、堀りと召喚、頑張ってみて！』

そうして、フィーの声が途絶える。レイジュはクリスタルに『ナイト死亡です』と囁くと、再び元いた僻地のクリスタルへと向かった。

僻地のクリスタルには、先ほどクリスタルを渡してくれた片手剣士がいた。

「よ、どうだった？」

ひらりと手を振りながら聞いてくる彼の隣に腰を下ろして、レイジュは深く息を吐く。

「……目まぐるしくて、とりあえず必死でした」

彼はからりと笑う。

「あんた：えっと、レイジュ、だっけ？　フィー姐さんがそう呼んでたよな」

「はい、レイジュ・カナンと申します」

改めて名乗り頭を下げると、彼は軽く目を見張った。

「そんな堅苦しくなくていいって。同じ国で戦う仲間なんだからさ。俺はアモランジュ・ノワール。アモって呼ばれてる」

それからしばらく、レイジュとアモはぽつぽつと話をしていた。

クリスタルを掘って、それをとりあえずアモが集める。途中何度か訪れた輸送ナイトにそれを渡して、また掘りつつ話す。

アモは、話上手のようだ。心地良いテンポで繋がられていく話題に、いつしかレイジュの顔にも、笑顔が浮かんでいた。

やがて、響く終戦の合図。

「勝ったみたいだな」

クリスタルの傍から立ち上がったアモが、軽く背伸びをしながら言う。

「お疲れ様、レイジュ。初戦勝利おめでとう」

「ありがとうございます、アモさんこそ、お疲れ様でした。：あまり役立った実感はないのですが：」

「ま、最初はそんなもんさ！　これからよろしくな」

そうして、アモが立ち去った後で、ふっと顔から表情を消して、

レイジュはそっと頬を押さえる。

「随分久しぶりに笑った、かな」

アモとの話は、とても楽しかった。笑うことを忘れていた自分が、自然と笑みを浮かべてしまうくらいに。

社交辞令のための微笑なら、作る自信はある。当たり障りなく、のらりくらりとかわしていくことなど、当たり前のように出来る：そう、思っていた。

「ちよつと、自信なくなっちゃったなあ。目的、忘れないといいいけど…」

ふと空を見上げる。戦争のざわめきが去った後の空は、静かに澄み渡っていた。

唇が、動く。

音を伴わずに囁かれたその言葉をかみ締めるように、レイジユは天を見上げ続ける。

やがて戦争を避けて姿を隠していたモンスターが戻ってくる、その直前まで、レイジユはただただじつと空を見上げていた。

若葉編 4 はじめての戦争 前線編（後書き）

※1 大ランスⅡ正式名称、ディバインスラスト。対召喚獣に大ダメージを与えられるが、隙が大きい。発動を敵ナイトに見られれば、ほぼ確実にカウンターを食らう。

小ランスⅡ正式名称、ディバインピアシング。弱攻撃。発動は速く、隙も小さい。

※2 バッシュⅡ正式名称、シールドバッシュ。片手ウォリアーのスキル。最長3秒間の行動不能状態、スタンを相手に与える。攻撃力はないが、スタンが非常に強力なため、片手の主力スキルといえる。

今回で若葉編完結です。ここまではほぼ説明ばかりになってしまいました。

次回から本格的に物語に入りますので、どうぞお楽しみに！

最後になりましたが、アモ君の名前を貸してくださった、Aちゃんに感謝を！

迷夢編 1 例えばこんな日常（前書き）

今回から、本格的に話に入っていきます。

迷夢編1 例えばこんな日常

戦場となる場所に足を踏み入れる。背後には、もはや見慣れた防衛側キープ：キャッスルがのしかかるような威圧感を放っていた。

（今回は、この防衛かぁ。ここ、ちょっと苦手なのよね）

まあ、入ってしまったものは仕方ない、と諦めて、レイジュは手の内の杖を握りなおした。

はじめて戦争へ行ったあの日から数ヶ月。裏方や召喚はそつなくこなせるようになった。何度かは、前線へ白兵戦をしにも行った。

装備も変わっている。今身を包むのは、黒字に赤い刺繍とレースがあしらわれたミニドレス風の防具。杖は、先端に乳白色のクリスタルがあしらわれた、身の丈ほどの黒い十字架型の杖：カオスロッドと呼ばれる杖だ。（※1）

現在Lv26。水系魔術を一通り習得し、現在は雷系の魔術を覚えてつつある。

最初は嫌悪感を覚えざるをえなかった『死』の瞬間にさえ、既に慣れつつある。

ちらりとキャッスルを見上げると、もはや慣れたしぐさでいくつかのジェムクリスタルを取り出し、杖に空いた4つの窪みに填めていく。青、赤、水色、緑：きちんと填め込まれたことを確認するように軽く一振りすると、ジェムクリスタルから発せられた淡い光が杖を包み込んだ。

「…よし」

眩き、眼前に杖を構える。もはや考えるまでもなく身に染み付いた呪文を唱えると、周囲が淡く輝き始めた。光はやがて数個の魔法陣を描き出し、それらが収束して、足元に一つの魔法陣を浮かばせる。詠唱と呼ばれる、ソーサラーの基本技術だ。中級以上の魔法を

使うために必要な精神集中…と言い換えても良い。

詠唱を終え顔を上げ、一息つく。と…

「レイジュちゃん！ 久しぶり〜っ！！」

「わ…っ」

後ろから飛びついてきた体に、レイジュはついよろめいた。

最初に戦争を教わって以来顔なじみになっているフィーは、何故かレイジュを猫かわいがりしてくる。本日もまた後ろから抱きすくめられて、頭を撫ぜられるはめになった。

「うーん、今日も可愛い可愛い！」

「フィーさん…髪が、ヘッドドレス落ちる…」

「気にしない、ね？」

笑いながら首をかしげるフィーの横で、ふわふわ浮いていた青いクリスタル、魔道具が賛同するかのように、くるりと回った。

「ほら、ルルちゃんもかわいいって」 (※2)

「フィー姐さん、もう戦争始まるから、そろそろやめとけよ」

フィーの肩を叩いて、疲れたような声で言うのは、やはり顔なじみとなったアモ。

どうやらこの二人は同じ部隊のメンバーであるらしい。レイジュもよく勧誘されるのだが、断り続けている。 (※3)

「あら？ もう…って、エンチャエンチャ…」

ようやくレイジュから離れたフィーは、慌てて杖と魔道具にジェムクリスタルを填めて行く。

レイジュは大きく息を吐いて、乱れた髪を手櫛で整えた。

「毎回聞くけど、大丈夫か？」

「毎回言っているような気がします、大丈夫じゃありません。何とかしてください…」

戦争で、街中で。出会ったたびに声をかけてくるフィーは嫌いではないのだが、時々こうして抱きつかれたり頭を撫でられたりと、何となく子供扱いされているところが若干不服なのだ。

「フィー姐さん、小さいものとか可愛いものに目がないから…」

苦笑いしながら言うアモ。レイジュは相変わらずの無表情に、うつすら呆れを滲ませた。

「それなら私じゃなくても。もっと可愛い方も小さな方もいらっしやるでしょうに…こんな愛想の悪いのを相手にしなくてもいいと思うのです」

「そうか？ レイジュは十分可愛いと思うが」

さらりと言われたその一言に、レイジュは思わず声を跳ね上げた。
「な…なっ、何を言っているのですかっ！」

「は…？ あ、いや、他意はないから、でも、ほら、レイジュ時々笑うとすごく可愛くて…」

「もう良いです女誑しですか貴方は！？」

ふいっとそっぽを向いたレイジュは、しかし後ろから見てわかるほどに真っ赤だった。

鳴り響いた戦争開始の合図とともに走り出したレイジュは、その真っ赤な顔を抑えながら僻地クリスタルへと向かったのだった。

「お熱いわねー、アモ君」

笑いを含んだフィーが、同じく走り出そうとしたアモを捕まえる。

「ふい、フィー姐さん…」

「あーら、可愛い。顔真っ赤！」

うふふと笑ってアモの頬を突くフィーは、名案を思いついたとばかりに瞳を煌かせる。

「ますます、レイジュちゃんをうちの部隊に入れたくなったわー。ね！？」

「何で俺に聞くんですか俺に！？」

再びうふふと笑ったフィーは、キープクリスタルに駆け寄ってクリスタルを受け取る。

「じゃあ、オベリスク建ててくるわー」

「あ、ちょ…」

あつさりとフイーに逃げられてしまったアモは、肩を落としながらもキープリスタルの前に座るのであった。

迷夢編1 例えばこんな日常（後書き）

※1 レイジュの装備は、武器はLv21オフィシャル杖・カオスロッド（最高攻性100まで強化済み、エンチャントスロット4）オフィシャルとは、ゲーム内通貨GoldとRingで、課金武器に匹敵する性能の品が買える店。ただし、開店するには条件がある。

防具は、Lv15共通装備・アーテラセット（最高耐性まで強化済み） カジノ装備。

カジノは、課金貨幣のAもしくはRオープで行う。リング運がよければ、武器や防具が手に入る。アーテラセットは、前回のカジノの共通装備。

※2 フィーの魔道具は、オラクルペンデュラム。フィーは魔道具に『ルル』と名前をつけている。

魔道具とは、ソーサラーの武器の一つ。杖とは違う上級魔法を使用できるが、逆に杖のときの上級魔法は使用できない。

※3 実際のゲームにある、部隊システム。特にシステムのみに有利になったりはしないが、意思の疎通が図りやすくなるのが有利といえは有利。

フィーとアモは同じ部隊に所属している。

逆に、部隊に所属していない（もしくは部隊でまとまって動いていない）人を野良ということもある。レイジュは部隊所属なしの完全なる野良。

迷夢編2 月夜

簡素な部屋に差し込む月明かり。脱ぎ捨てられたブーツとヘッドドレスが、ベッドの側に転がっている。

銀の髪をベッドの上に散らして、レイジュはうつろな瞳で天井を見上げていた。

一つの戦争が終わって、首都へと帰った夜。今回の戦争は、惜しくも破れた。しかし、実のところレイジュは勝敗にはそう興味がなかった。

呆けているのは、別の理由からだ。

（痛かった、なあ）

今回の戦争は、後半は前線に出ていた。その時のことである。

敵の短剣スカウトに、背中からばつさりと切られて、レイジュは1度死んでいる。もはや「死ぬ」ことに対して特別な感慨を抱くことはなくなったが、今回は少し違った。

（パニッシングストライク…）

短剣スカウトのスキルの一つであり、おおよそ全ての技の中で最強の攻撃力を持つ。スカウトに弱いソーサラーにとって、それは容易に致命傷となりうるものだ。（※1）

それを思いだし、レイジュは肩口を押さえる。もはや傷跡すら残っていないが、その時の様はありありと思い出せた。

（実際にくらくと、やっぱり痛い、な…）

ふ、と小さく息を吐き、レイジュはベッドから身を起こす。

今晚は、眠れる気がしなかった。

かつては「街」であった土地の、廃屋の屋根の上。夜風に煽られながら、『彼女』は立っていた。

手にするのは細身の二刀短剣。凝る血の如き暗赤色の瞳が、じっ

と夜の廃街を見下ろしている。

ゆっくりと、『彼女』は足を踏み出した。屋根の上から上へと跳び移り、先を目指す。

ある場所で屋根の上から飛び降りて、ほとんど音を立てずに地上へ。月影の届かぬ細い路地を迷わず走り抜けて、目的地を目指す。

そこは、小さな庭園のようだった。しかし、そこに存在する巨大なクリスタルが、ここが戦場になりうる場所だということを示している。

『彼女』は、しばしクリスタルを眺めていた。クリスタルの放つ青白い光を受けて、その瞳が揺れる。それはどこか苦しげにも、ものの悲しげにも見えた。

やがて、『彼女』は一方の短剣を鞘に納めると、足下に咲く花を1輪摘み取った。白い小さな花を手に持ち、少女はクリスタルに背を向けた。

再び歩くことしばし。次第に家はまばらになってゆき、やがて見えてくるのは石塔の立ち並ぶ区画。かつては墓地であったのだろう。この区画まで戦火は及んではないようで、立ち並ぶ石塔はどれも年月を感じさせるが、壊れてはいなかった。

『彼女』はその中で、唯一あまり年月を感じさせない石塔に歩み寄った。表面にうっすらと生えた苔を取り、下草を払う。

どうやら、これだけが年月を感じさせないのは、『彼女』が手入れをしているかららしい。その動きは手慣れていた。

きれいになった石塔の前に、『彼女』は摘み取ってきた花を捧げる。それからしばらく、『彼女』は石塔に祈りを捧げていた。

やがて、『彼女』は頭を上げ、石塔の表面に刻まれていた文字に手を触れる。

一番上の姓を記したと思われる場所は大分薄れていて、かろうじて解るのは先頭の「Ka」の2文字のみ。

その下に刻まれたのは3つの名前。上から順に、「Dias」^{ディアス}、「Serah」^{セラ}。最後の一つは、強引に付け足されたようだ。ひっかき傷のような文字で、かろうじてわかるその名は、「Solt」^{ソルト}。『彼女』はその一番下の名に指を這わせる。

月明かりの中、その指先はかすかに震えていた。

迷夢編2 月夜（後書き）

※1 パニッシングストライクは、ハイド中のみ使用可能なスキル。非常に強力であり、特に対ソーサラーにおいては、エンチャントの値やサブクラス補正（※2）も影響するが、最大800以上のダメージを与える。

実際のゲーム内において、HPは1000に固定されている（HPアップのエンチャントで、最大+200されるが、それでも最大1200を超えることはない。これはLv1でもLv40でも同じ（※3））

よって、特にソーサラーに対しては、ほぼ1撃必殺のスキルである。

※2 実際のゲーム内では、「転身の羽」「流転の羽」というアイテムを用いてクラスを変えることが出来る。

Lvはそれぞれのクラスごとで保存される。

例えば育て方によって、ソーサラーはLv40、スカウトはLv20、ウォリアーはLv10、セスタスはLv1となったとする。この場合、現在の職がソーサラーだとすると、転職してスカウトになればLv20に、ウォリアーになればLv10に、セスタスになればLv1のキャラになる。

他の職のLvを上げる利点は、現在の職に対して苦手な職のLvを上げればその職からのダメージが緩和され、得意な職のLvを上げればその職に対するダメージが増加する。

例えば、ソーサラーがスカウトのLvを上げれば、スカウトからのダメージが減少する。ウォリアーのLvを上げれば、ウォリアーに与えるダメージが増加する。

※3 ゲーム内における最高Lvは40。

迷夢編3 食堂の珍事

翌朝、レイジュはいつもより更にぼんやりした目で食堂を訪れた。目元に隈こそ浮いていないものの、顔一面に『寝不足』と書かれていたような有様で、朝食のパンをもそもそと食べる。

と、不意にその目の前に手が差し出された。ぼーっとそれを見ていると、そのままひらひらと振られる。

「……？」

「起きてるか？」

「……あ、アモさん……おはようございますー……」

言いながらも、ふうっと視線が揺れ、首がかくりと前に折れた。

「おいおい大丈夫か！？」 休んでたほうが……」

「いえー……ちょっと眠れなかったただけなので……平気です……」

「いやそれ絶対大丈夫じゃないだろ！？ ちょ……レイジュ起きろって！ せめて部屋で寝ろ」

そのまま眠りそうになるレイジュをとっさに支えたアモは、助けを求めるように辺りを見回した。そこに食堂に入ってきたフィーの姿を見つけると、ほっとしたように声をかける。

「姐さん！ 丁度良かった、ちょっと助けてくれ」

大きな声で呼ばれたフィーは、二人のほうを見ると慌てたように寄ってくる。

「レイジュちゃん！？ どうしちゃったのよ？」

「何か、昨日寝れなかったとかで。部屋にと思ったんだけど……」

「連れてってあげればいいじゃない」

「レイジュの部屋知らないんだよ。第一……ほら、女の子の部屋に、さ……」

声を落として言うアモに、フィーはにんまりと笑みを浮かべる。

「いいじゃない、チャンスチャンス、ってねー！」

「姐さん！」

「何にしても、運ばないとね。んと：宿舎の管理人さんに聞けばわかるんじゃない？」

：ははあ、1人で行くのが恥ずかしいのねー！ わかったわかった、おねーさんが付いていってあげましょう！」

勝手に顔色を読んで勝手に続けるフィー。アモは慌てふためきながらも、下手に動けばレイジュが椅子から落下してしまうため、動けないでいる。

「そうねえ：あ、いたいた、シェン君ー！」

フィーは、先ほど食堂に入ってきたばかりの男性に声をかけた。2本の短剣を腰の後ろに挿したスカウトと思しき彼は、首をかしげてフィーの元へと近づく。

「おやおや、どうしましたか？」

「ちよつと、この子部屋まで送ってくから、『ルキフェル』の皆に、あたしとアモ君朝食一緒できないごめん、って伝えておいてくれないう？」

「頼む、アシェン」

『ルキフェル』は、フィーが隊長を務める部隊である。アモも、アシェンと呼ばれた青年もそこに属している。

アシェンは快く頷くと、レイジュを見て顔色を変えた。

「なっ：その子：アモ、襲ったのか？」

「どこがどうなってそういう結論になったんだこの野郎！ 見てのとおりただ寝てるだけだ！！」

「冗談だよ、冗談」

「言っいいい冗談と悪い冗談の区別ぐらい付けやがれ！」

「まあ、それはそれとして。隊長、この子は？」

「可愛いでしょう。今頑張ってるんだけど、なかなか頷いてくれなくてねえ」

フィーはそう言って、眠るレイジュの頬をつんつんと突く。

「…ん……」

小さな声を上げて、レイジュがフィーの手に擦り寄ってきた。

「……かわいいー！！！！！」

「姐さんストップ！ レイジュ寝てるんだから！」

レイジュに抱きつこうとするフィーを片手で制して、アモは若干安定を崩したレイジュを支えなおした。

「この子、レイジュと言うのですか？」

「そうよー、レイジュちゃん。レイジュ・カナン…だったかな？」

フルネームは

「カナン…ですか…」

アシェンが小さく呟いた声を聞き、アモは首をかしげる。

「アシェン？」

「…いえ、昔の知り合いに、『カナン』というのがいたように思ったのですが…僕の知っている『カナン』は男でしたからね、気のせいでしょう」

「兄妹だったりして」

フィーが興味深々、といった感じで会話に割り込む。アシェンは肩をすくめた。

「さあ？ そこまではわかりません。

さて、その子を送っていくんでしたね。わかりました、皆には僕から伝えておきます」

そう言ってひらりと手を振ると、アシェンは他の部隊員の元へ歩いていく。

アモがバランスを崩さないようにしながらレイジュを抱き上げたことを確認して、フィーが声をかけた。

「じゃ、行きましょっか。…お姫様だっこ、かっこいいねえ」

「…」

もはや何かを言う気力も失せたのか、アモはレイジュを抱き上げたまま、食堂の出口へ向かった。

迷夢編 4 リボンと秘め事

5階建ての宿舎の3階、その西の角部屋がレイジュにあてがわれた部屋だった。眠りこけたレイジュを見せて合鍵を借りて、フィーは楽しそうに部屋の扉を開ける。

扉を開けて部屋に入ると、フィーはぼつりと言った。

「何もないわねー…」

確かに、とアモも頷く。

レイジュの部屋にあるものは、据付のベッドと小さな机、引き出し付きの棚がひとつ。それ以外にあるものといえば、戦場へ持って行っているであろう小さなベルトポーチと、雑多なものが入っているのであろう、少し大きめの肩掛けカバン。いつも持っている杖が1本。それだけであった。

アモがベッドにレイジュを降ろす。その間もレイジュは目覚めることなかった。

その間、部屋の中を物色していたフィーが、レイジュの杖を手にとった。

「んー、でもこれだけちよっとお洒落ね」

レイジュのカオスロットには、他のカオスロットとは違う特徴があった。持ち手のやや上あたりに、白いリボンが巻きつけられている。正面でちょこんと結ばれたリボン結びの中央に、淡い紫の石の填まったブローチが止めてあった。

「んー、可愛い…あれ？」

リボンの辺りを持っていたフィーの手が、ふいに止まった。

「姐さん、そろそろやめといたほうが…」

「この杖、変。感触が違う…」

と、フィーは何を思ったか、突然そのリボンを外し始めた。

「ちよっと…!」

「後でわからないように戻すわよ」

リボンは、思ったよりも長く巻かれていた。それを解ききって、フィーは息を呑む。

カオスロッドの、リボンの巻かれたその下に、大きな傷が走っていたのだ。

「これは…ひどいわ」

フィーは杖を走る傷をじっと見つめる。よく見れば、それは丁寧に補修されている。薄く残る傷跡を辿り、フィーはぼつりと呟いた。「多分この杖、1回折れてるわね。それを丁寧に修復して使ってるけど、傷が残っちゃったみたい」

「よく、わかりますね」

「あたしも何度か修復忘れて、杖壊したことがあるもの。でも、これはそういう感じじゃなくて…何か、切られた？ そんな感じ」 （※1）

そして、フィーは再びくるとリボンを巻きつけ始めた。器用にリボン結びにして、真ん中にブローチを止めれば、見た目は元通りとなる。

アモは、すやすやと眠るレイジュを見つめた。穏やかな寝顔だ。しかし、あの杖の傷を見た今…レイジュがどこか遠い存在にも思えた。

「アモ君、もちろんこれは他言無用。レイジュちゃんの前でも今までどおりでね」

戸惑いを覚えながらも、アモは頷く。

結局、2人が部屋を出るまでに、レイジュが目を覚ますことはなかった。

朝食を食べ終え、戦争もまだない平和な時間。いつものたまり場を離れて、アシェンは人気のない場所に来ていた。

アシェン・ジグリッド。彼は基本根無し草である。今は『ルキフェル』に身を寄せているが、これまで入った部隊は数知れず。それと同じ回数だけ、部隊から離れてきた。あるときは部隊に所属することなく、1人気ままに戦場に赴く。

だから、彼がたまり場にいらなくても、誰も気にしない。それが今、彼にとってはありがたかった。

「レイジュ・カナン：」

先ほど一方的に出会った少女を思い出す。

「銀の髪で、『カナン』ですか：」

思い過ぎし、だとは思いう。アシェンの知る『カナン』は、銀髪ではあったが、そもそもソーサラーではない。その職にこだわりを持っていた『カナン』が、やすやすとクラスチェンジをするとは思えなかった。

しかし、あの銀の髪が：。

いつか、起きているときにあの少女に：『レイジュ・カナン』に会いたい。そう思い、アシェンはまたあてもなく歩き始めた。

迷夢編4 リボンと秘め事（後書き）

※1 武器や防具には、耐久度というものがある。スキルを使った
り攻撃を受けたりするたびに耐久度は減っていく、耐久度が0にな
ると、武器ならスキルが使えなくなり、防具なら耐性が0になる。
耐久度を回復させるには、「砥石」というアイテムが必要。

迷夢編5 傷跡のない兵士たち

窓から差し込む西日が眩しくて、レイジュは目を覚ました。

「…え？」

起きて一番に、周りを見回す。見慣れつつある自分の部屋だ。次に外を見る。西から差し込む赤い夕日：どう考えても夕方である。

そして、思い返してみる。朝、食堂へ行った記憶まではあるのだが：その後は、ふつりと記憶が途切れている。

「うわ：まさか食堂で寝ちゃった、の…？」

どう考えてもそうとしか思えない。と、すると、誰かがここまで運んでくれたのだろうか。

思わぬ醜態に、レイジュは顔を青ざめさせた。

と。

外がざわついていることに気付き、レイジュは窓から外を見た。

首都に入ってすぐのところに不自然な人だかりが出来ている。

「…また一体何が…？」

ふと息を吐き、散歩がてらにと部屋の外に出た。

「…って、ちょ…」

「でも…クリスタルで…」

徐々にはつきりと聞こえてくる声。人と人の間をひよいひよいとすり抜けて、レイジュは人だかりの中心にたどり着く。

「だから！ キープリンククリスタル外れた状態で負った怪我は治らないっていつてるだろうが！」

「じゃあどうするんだよそれ！？」

大声で言い争うのは、何度か戦場で見かけた覚えのある3人組だった。1人は負傷しているらしく、手から血を流している。

「何事ですが、一体…」

ぽつりと言うと、近くにいた人が教えてくれた。

「戦争中に、キープリンククリスタル落としちゃったんだってさ。それで怪我が治らないって大騒ぎしてるんだよ」

レイジュは軽い頭痛を覚えてこめかみを押さえた。

「素直に手当てすればいいものを…」

眩いた瞬間、レイジュに視線が集中した。

「…はい？」

あっけに取られたようにレイジュは眩く。

「あんた、手当てできるのか？」

「あなた、出来ないんですか？」

問いに問いで返すと、彼は戸惑うように、周りを見る。

「だって、なあ…」

「どうせ怪我しても、キープリンククリスタルつけてればすぐ消えるし…」

「だよな…」

周りは皆口々にそう言っていて、レイジュは大きな溜息を落とす。
「…清潔な布と水、それと度数の高いお酒、貰ってきていただけますか。あと、傷口を見せてください」

「あ？」

レイジュは頭を押さえていた手を離して、言った。

「私が手当てする、と言っているのです。道具を取ってきますので、そこで待っていてください」

言うときささときびすを返し、宿舎に向かって歩き出した。

レイジュが箱を持って戻ってくると、先ほど頼んだ布と水、そして酒が用意されていた。

「失礼します…アームブレイクでも当たりましたか？」

「よくわかるな」

手の甲に付いた傷を眺めて、レイジュは言う。

「多少深いですが、傷口自体は綺麗なものです。相手の腕が良かつ

たようですね。：少し痛みますよ」

酒と、布を一枚手に取ると、栓を抜いた酒を傷の上にかけていく。治療を受ける男の顔が引きつった。

「少し、って、もんじゃ：」

「少し黙って、手を動かさないで」

水で濡らした布で酒と血をふき取り、きれいになった傷口。レイジュは持ってきた箱からガーゼと瓶を取り出すと、瓶の中身をガーゼの上に塗った。

「なんだそれ：何かヤバそうな緑色してるが：」

「傷薬です」

一言で答えて、ガーゼを傷口に押し当てる。

「――――：……ツツツ！！！！」

男が悶絶した。うつすら涙の浮かんだ恨みがましい目でじっと見つめられても意に介さず、ガーゼをもう1枚重ねると、上から包帯でぐるぐる巻いていく。

「片方終わり。もう片手も：出しなさい」

手を強引に引き出された男は、再び悶絶涙目になりながらも両手に包帯を巻かれる。

「はい、これで終わりです。あとは3日くらいは戦争行かずにおとなしくしていた方がいいですよ。傷が開くと厄介です」

言いながら手際よく薬と包帯を箱に戻し、立ち上がった。

「では、私はこれで」

軽く頭を下げて戻っていくレイジュの背を、周りの皆は啞然とした様子で見ている。

「ふう：無駄に疲れた：」

部屋に帰ったレイジュは、ベッドに腰掛けて呟いた。

仮にも『兵士』が、治療法すら知らないのは予想外だった。キー

プリンククリスタルの弊害、であろうか。

レイジュの薬箱は、傷薬に関しては完全に手作りだ。売っていないのだから仕方ない、と、時折魔物討伐しながら薬草を集めては作っていたのだが、売っていないのにはこんな理由があったとは。

「これは、根が深い…」

呟いて、手の内で光るキープリンククリスタルを弾く。夕日を受けて輝くクリスタルは、憎らしいほどに美しかった。

迷夢編6 フィーの頼み

「お願いレイジュちゃんっ！」

その日の朝は、フィーのそんな一言から始まった。

いつも通りに食堂で朝食をとっている最中のことである。レイジュの前にフィーが座るなり、いきなり手を合わせて頼みこんできたのは。

「…ええと、いったい何が…」

「うちの部隊メンバーが一人、旅に出ちゃって氷皿足りなくなっちゃったの〜！」（※1）

「…」

何とか断片化した話を繋ぎあわせると、こうなる。

フィーの部隊『ルキフェル』は、もともと人の出入りの激しい部隊であった。そのため構成を合わせることはしていないが、それでも戦術の要の1つである氷皿は、最低2人は欲しいらしい。（※2）

が、その氷皿であったところの部隊員テオ・フェールラインが突然旅に出てしまったため、今フィーの部隊には氷皿がフィー自身しかないとのこと。そのフィーも、重力とのハイブリッド型で必要なスキルが足りないとか。

「つまり、今必要なのはサンボルの使える氷皿！　ってことでレイジュちゃん、あなたは？」（※3）

「まあ、サンボルは使えますが…レベルが足りないので極めていませんよ」

先日Lv29に上がったとはいえ、まだレベルは足りていない。

一息つくためにコーヒーに口を付け、レイジュは言った。

「何度も言っているとおり、私は部隊に入る気はないんです。それに、サンボルを極めるのは氷ソーサラーとしてはスタンダードなスキル構成です。私でなくとも、探せばどこにでも…」

「もうひとつ、理由があるのよ」

レイジュを遮って、フィーは言った。

「レイジュちゃん、ハイドサーチ得意でしょ！？　これは貴重な能力だわ」

レイジュは目をしばたかせた。

「それはまあ、当然のたしなみとしてハイドサーチはしていますが、得意と言うほどでは…」

「外周から潜入してくるハイドと崖上から降下してくるハイド両方見つけて暴いて潜入させないのは、十分得意の部類に入ると思うの。実はこっそり評判になってるのよ？　『レイジュ・カナンという氷皿のいる戦場は、非常に潜入しにくい』って。すぐに暴かれるから」

レイジュは納得のいかない様子ではあるが、だまりこんだ。

「だからお願い！」

改めて手を合わせて頼み込むフィーに、レイジュは沈黙を守る。

やがて、その口から細い息が漏れた。

「残念ですが…私はどこかの看板を背負って戦いたくはないのです…ですが」

レイジュは脇に立て掛けたカオスロッドを握り、立ち上がる。

「同じ戦場で戦うときは、パーティー組んで共に動く…くらいでしたら」

本当は裏方をやる方が多いのですが、と続けて肩をすくめたレイジュの手を取って、フィーは力一杯言った。

「それでもオッケー！　是非お願い！！」

その後、レイジュの周辺はやや慌ただしくなった。

一応共に動く機会が増えるということで、フィーの部隊メンバーにも紹介された。アモとは既に顔見知りであったが、他のメンバーとはほとんど言葉を交わしたことがなかったのである。

部隊のモットーが「楽しく・自由に・真剣に」という空気のせい

か、それともフィーの人柄か。部隊メンバーたちは個性的ながらも楽しい人が揃っている。

部隊長のフィーを筆頭に、短剣と銃のハイブリッドだという壮年のスカウト・アレイスに、召還好きの火ソーサラー・シシィ。建築物を殴ることが生き甲斐だという両手剣士のナデイルといった個性豊かな副隊長たち。

そう大きな部隊ではないものの、いい部隊だ、と思えた。

それでも、レイジュは部隊に入ろうとは思えなかったけれども。

迷夢編6 フィーの頼み（後書き）

※1 皿Ⅱソーサラーの略

他の職では、ウォリアーⅡヲリ、スカウトⅡスカ、セスタスⅡセス、せっちゃん等、フェンサーⅡ笛

※2 部隊で纏まって戦場に入る場合、戦術を決めて構成を合わせることがある。

部隊戦が盛んなサーバーでは良くある。

※3 サンボルⅡサンダーボルトの略。ソーサラーのスキルで、雷系中級。遠距離に雷を落とし、当たった相手を吹き飛ばす。

レイジュの特技発覚、ですが、実際にハイドサーチをし続けながら普通に前線に立ち続けるのは至難の業です。

小説補正ということだ。

迷夢編7 新月の廃墟（前書き）

F E Zを実際にご存知の方へ。

今回オリオン廃街が出てきますが、この物語の都合上、オリオンは旧キプ位置のオリオンとしています。（あの攻撃側超有利MAPだったときの状態です）

迷夢編7 新月の廃墟

かつてそこは、栄えた町だったのであろう。

立ち並ぶ大きな家の数々。隆盛のときを偲ばせる、白亜の噴水。憩いの場であっただろうベンチ。今なお花を咲かせ続ける花壇…。

そしてそれらを残りに破壊するように、大きく歪んだ大地がその足元に広がっていた。

今は「オリオン廃街」と呼ばれる、戦場の一つ。月のない夜の合間を縫って、彼は駆けていた。

彼の名はモールレッド、仲間からはレッドと呼ばれている。このオリオンを攻めている側の所属であり、短剣を操るスカウトである。もはや制覇を終え、クリスタルを掘る数人以外に誰もいなくなった市街部分…そこに、謎の人影を見つけたからである。

気のせいだとも思った。何しろ、所属がわからないのである。本来戦場において、そんなことはあるはずもない。

しかし…彼は見つけた。

戦場の片隅、オリオン市街地部分の片隅にて、一つの家の前に佇む『彼女』を。

服装は共通装備だが、手にした武器からしてソーサラーであろう。加えて、こちらに気付いてもいないようだ。

勝てる。そう確信して、レッドは『彼女』の背後に忍び寄った。

そして、短剣一閃。

（まずは攻撃手段、次に魔力を封じる…！）（※1）

そう決めて振るった短剣はしかし、最初の一撃のみを繰り出すに終わった。

アームブレイクをまともに受けた『彼女』の手から…血飛沫が舞ったから。

「あ…ッ！」

「え、嘘…」

『彼女』の短い悲鳴と、思わず漏らしたレッドの声が重なる。取り落とした杖を拾い上げようと『彼女』は動くが：

「い、ったあ…」

杖を握るには、傷は深すぎたらしい。『彼女』は杖を再び取り落とし、呻く。

ぱた、ぱた、と小さな音を立てて、『彼女』の手から滴り落ちた赤が、石畳に花を咲かせた。

「お、おいお前、まさか民間人…!？」

「だったら、どうするっていうの…?」

両手を庇いながらもレッドを見返して、『彼女』は言う。可憐な声色には筋が通り、夜闇に凜と響いた。

「な、何でこんなところに民間人がいるんだよ!? 戦場だぞ!!?」

混乱を隠せないレッドが叫ぶ。対して、『彼女』はあくまで冷静だった。

「ああ、今は戦争中だったのですか…。静か過ぎて、気が付きませんでした」

「って、だとしても、何だってこんな場所に…」

「私は、この町の元・住人。故郷に帰って、何の不思議が?」

さらりと言われて、レッドは絶句する。『彼女』は更に続けた。

「そもそも、私の目的地はオリオンの町の中とはいえ、戦場ではない場所。その途中でここを通りかかっただけ。…まあ、しかし…」

この手では無理ですね、と呟いて、『彼女』は踵を返した。落とした杖を両腕で抱きしめるように持ち、しっかりとした足取りで歩き出す。

「あ、おい…俺の陣営のキープまで来いよ。その手、手当てくらいはしないと…」

「手当て? あなた方にまともな手当てが出来るとでも?」

ふっと皮肉な笑みを浮かべた『彼女』は、レッドの方を向いて、一言、言った。

「お断りです。傭兵の情けなど、誰が受けるものですか」
そのまま颯爽と立ち去る『彼女』。レッドに出来ることはただ、
その背を見送ることだけだった。

迷夢編7 新月の廃墟（後書き）

※1 アームブレイク（武器を使用不能にして、あらゆるスキルの使用を封じるスキル）↓パワーブレイク（詠唱状態を解除し、P W が徐々に減る状態にするスキル）と入れようと思ったようです。

迷夢編 8 目標戦・戦前

「さてさて皆っ！ レイジュちゃんとの動きの合わせ方も慣れてきたわね！」

今回は目標戦、しかも久々にオフィシャル開店するチャンス！
気合い入れていきましょー！！」

いつもながらに高いフィーのテンションにも慣れてきた頃。レイジュはパーティー内に流れる声を聞きながら、今回の戦争の指揮者から敵軍の資料を受け取った。

戦争が始まる前であっても、ある程度敵軍の情報を把握できるのはありがたいのだが、同様にこちらの情報もほぼ筒抜けかと思うと複雑な気分になる。

「どうぞ」

資料の中身をみることなく、そのままフィーに手渡す。フィーは軽く礼を言うと、そのまま中を読み始めた。そして：眉を寄せて、呟いた。

「……げ」

「どうしたの〜？」

火皿のシシイが間延びした声で問いかける。フィーは資料から目を離さないままに言った。

「今回の戦場、多分超きつついわ」

「んー、どれどれえ：うっわあ」

シシイがフィーの手元の資料をのぞき込み、同じく顔をしかめる。

「弾幕部隊にい、ガチにい、個人でハルとKIKORIキコリペアあ。地獄じゃないの〜」

「：ええと、どういふことか聞いても？」

意味が分からず、レイジュが首を傾げる。

「ええとねまずこの4人ね」

フィーは資料の名前を指さす。

ユステイナ・カーミル。フィリオ・サヴェンティス。フィリイ・サヴェンティス。アリシア・セレス。

「この4人が、通称弾幕部隊、正式名称カラミティレインという部隊のメンバーね。こいつらがいると、とにかく弾幕がきつくなつて皿涙目。で、次この6人」

クレディル・ヴェーンレイホルツ、ヴァレイド・ウエフバックス、レリシア・エーデルシュタイン、リスセリア・ターティス、シャリル・イーズ、ジュレク・ラローティ。

「破曉の剣っていう部隊。こいつらいつも構成固めてひき殺しにくるから要注意。で、個人ではこいつ」

ハルとだけ書かれた人物を指す。

「短剣スカウトなんだけどね、妨害がすごく上手で怖い。いるだけであつちは勢いづくわ。で、最後にこの二人」

ディオル・ベリロス、ハヴィ・ディノスト。

「両手とセスタスで、いつもつるんでる。こいつらが僻地に来ると必ずオベ2〜3本持っていていかれる、ってくらいに建築破壊に特化してるわ」

はあ、と息をついて、フィーは肩を落とす。

「きつつい戦場になりそう…」

と、密やかな笑いがフィーの耳に入った。

顔を上げると、そこには口元に片手を当ててくすくすと笑うレイジュ。不思議だと首をかしげると、レイジュは笑いを収めた。しかし、その口元にはどこか馬鹿にしたような笑みが浮かんでいる。

「最初から気持ちで負けていては、勝てる勝負も勝てませんね」

「レイジュちゃん？」

「敵を嘆くより、周りを見回してみては？ 貴女の周りに立つものたちは、それほどに頼りになりませんか？」

もしも貴女が一人嘆くのであれば、それは私たち…いえ、この場に集う私たちの軍全てに対する冒瀆です」

最後だけは笑みを消して、レイジュは涼やかな眼差しを回りに向

ける。集団の只中で唐突に声を上げたレイジュは、いつの間にやら目だってしまったていたらしい。（※1）

少し恥ずかしそうに俯くものの、一息ついてレイジュは再び語ります。回りの者にも聞かせるように、少し大きな声で。

「相手を見て絶望に浸る前に、仲間を見て希望を見つける方が建設的ではありませんか？」

相手は強い。有名な相手がいる…それが何です？ 私たちはそこまで弱いですか？ 今まで磨いた自分の腕に、共に戦場を駆けてきた仲間に信を置けないほどに、私たちは脆いのですか？

何より…まだLv30にも満たない小娘にこんなことを言われて、貴方たち、悔しくないのですか？」

ふと、古参の面子の瞳に光が点る。レイジュは更に続けた。

「勝てそう、負けそう…それが何ですか？ どれほどに危機であっても、逆転の手段は残されている、それが戦争というものでしょう？ ですから…皆様、勝ちにいきましょう。予想なんて、覆すためにあるのですから」

言い切って、レイジュは一息つくと、キープの裏に向かって歩いていった。

静寂の後、沸き立つ兵たち。その様を見ながら、フィーはちよつと感心したように呟いた。

「へえ、レイジュちゃん…なかなかやるじゃない」

そうして、レイジュの後を追ってぱたぱたと駆けて行って…直後、全員のキープリンククリスタルからフィーの叫びが聞こえた。

『きゃー！！ 可愛い、顔真っ赤〜！』

『い、言わないで下さい恥ずかしいんですからッ！！』

再びの静寂の後…今度は軍全体が大爆笑に包まれたのだった。

「あー…恥ずかしいです…まだ顔が赤い…」

キープの影で蹲っていたレイジュは引っぱり出され、ルキフェル

のメンバーの中心に。後ろからフィーががちりホールドしているため、レイジュは全く動けなかった。

「かわいいー！ でも、あんなことさらっと出てくるところが凄いわ」
「さらっと、じゃないです…ちよっと、知り合いの真似をただけで…」

顔を真っ赤に染めたままのレイジュは、そういつて俯いた。

「知り合い？」

アモが聞くと、レイジュは俯いたまま小さく頷く。

「商人だったので…人を乗せるというか、その気にさせるのが大層上手で…」

「へえ…ねえ、男？ 女？」

「男性ですよ…でも私は、あの人ほど上手には出来ません…」

「男、ねえ…」

そう意味ありげにアモに流し目を向けるフィー。アモが何かを言う前に、レイジュがぼそぼそと先を続けた。

「でも…今回ばかりはどうしても勝っていたきたくて…正直に申し上げれば、私、未だ『オフィシャルシヨップ』とやらが開いている所を見たことがないんですよね」

「え？ その杖、オフィ杖でしょ」

「これは貰い物です」

レイジュはカオスロッドをちよっと掲げ、言った。

「一度、見てみたかったんですよ、オフィシャルの開くところ…つと、そろそろ始まりますね」

「あ、ほんとだ」

各々武器防具と道具の最終確認を行い…鳴り響く開戦の合図。

今、目標戦が始まった。

迷夢編 8 目標戦・戦前（後書き）

※1 気付かないうちに、軍チャで誤爆していました。

誤爆Ⅱ間違えて発言すること。チャットの切り替えを間違えて起こることが多い。

迷夢編9 目標戦・前半（前書き）

実際にFEZをやっている方へ。

一応、シュミレーションはしてありますが、大分小説補正が入っています。

迷夢編9 目標戦・前半

「さて、厳しいなら厳しいなりに、領域とって確実に稼いでいきましょ！ 『ルキフェル』総員、まずは一気にオベ展開！」

開幕直後、気分を立て直したフィーの声がキープリンククリスタルから響く。クリスタルが集まり次第、順次散っていく面々に混じって、レイジュもまたオベリスクを建てていた。

（さて：どうしましょうか）

建設予定地に陣取って、前のオベリスクが建つまでの僅かな時間、レイジュはそっと溜息をついた。手の甲を覆うハンドスキンの上から右手を撫で、しばし考えた後：持っていた杖を左手に移す。そして、その杖を軽く一振り。納得のいかない様子ではあったが、レイジュは左手で杖を握りなおした。

『現在地にオベリスクを建設します』

機械的に言い、地面にクリスタルをばら撒く。強い光を発したクリスタルたちが消えると、地面からせり上がるようにオベリスクが生え始めた。

「オベリスク展開、終了」

脳裏に浮かぶ戦場の地図と報告の位置を合わせ確認すると、さっと周りを見渡した後、詠唱を行う。

「さて：この1戦、持てばいいのですけど…」

ぽつりと呟いて、レイジュは走り出す。目指すは前線。左手に握られた杖が、きしりと音を立てた。

時間と場所は若干移り変わる。レイジュ達にとっては『敵』に当たる者たちが集う、相手のキープ前。開戦直前のことだ。

「今回は…えと、敵は、部隊では『ルキフェル』と『鉄拳制裁』が

来ていますね。個人では：修復屋カイリンシエル・ビオレータと、銀行帝王イディラード・エイル：ということは、あちらは建築・召喚を充実させて来るでしょう」

頭に青い花飾りをつけた、弓を持った少女が言う。

「なあるほど。まあでも、アタシたちのやることは変わらないけどねえ」

大きく体を露出させた服装のソーサラーが笑って言った。

「『油断は禁物』」

服装の違いはあるものの、そっくりな二人が声をそろえる。女性のほうは魔道具を持ったソーサラー、男性のほうは弓スカウトのようだ。

「だが：期待はさせてもらうぞ、ユステイナ殿」

「あらあ、クレデイルさんじゃないのお。どうしたの？いつもはアタシたちのこと、『遠くからしか撃てぬ臆病者が』って言ってるくせにいい」

からかうような口調で、ユステイナと呼ばれたソーサラーが言う。クレデイルと呼ばれた壮年の男性：片手ウォリアーのようだ：は、僅かに眉根を寄せて一つの名前を指した。

「この、レイジュというソーサラー：スカウトの皆から報告があったな。潜入を許してもらえない、切り崩しが出来ないと言っていた」

「ああ、何か最近向こうに現れたっていう、ハイドサーチ得意なお？でもハイドサーチなんて、誰だってやってるじゃない」

「その的中率が半端ではないらしい。だから：今回ばかりは、敵ソーサラーを前線から消し去るほどの弾幕が必要なのだ。相手にどんな仕事もさせないために、な」

ふうん、と鼻先で言うと、ユステイナは優雅に髪をかき上げる。

「まあ、アタシたちはいつでもどおりにやるだけよお。『カラミティレイン』のいる戦場で、弾幕が止むことはありえないわ。つ・いで・に、そのレイジュって皿ちゃんも止めちゃえばいいんじゃない？」

ふふ、と艶っぽく笑い、ユスティナは部隊員に声をかける

「アリシア、フィリイ、フィリオ：『災厄の雨』^{カラミティレイン}の名前の意味、しっかり見せ付けてあげちゃいましょ！」

一斉に頷く3人。開幕の合図が響くと共に、4人は一斉に走り出した。

『前線組、様子教えて』

前線に向かって駆け行く中、パーティ内に伝達されるフィーの声。

『今、前線についた。こっちは破曉と弾幕が来てるな。何とか持つてはいるが、前線はじわじわと後退中だ』

渋みを含んだアモの声がそれに答える。

『同じく前線だが、こりゃちよつと潜入は難しいな。どこ行っても何かが降って来やがる』

同じく、苦悩を滲ませたアレイスの声。

レイジュは横手から前線に合流しようとしながら、辺りを見回し、言った。

「私は現在最前線の南東付近、まもなく前線に合流します。ここから見る限り、相手に召喚はいないようですね。遠目ですが、門の存在も確認できません」

『了解、あたしもすぐに前線に行くわ。シシィちゃん、裏はどうなってる？』

『えっとねえ、今、門建ててるわ。レイスも準備してるけど、ナイトがいないのお。フィー隊長、あたしナイトいくわねー』

『わかったわ、頼んだわよ！』

『頼まれたわ。召喚なら任せて！』

銀行開始を告げる男性の声が軍全体に流れ、自軍召喚の影が少しずつ見え始める。

レイジュは前線間際で再び詠唱をかけ直し、青い液体の入った瓶を取り出した。

「とりあえずは、横から前線凍らせに行きますよ」

そう言って、駆け出す。うまく相手の視線から逃れ、前線横手付近の崖上から一気に降下。空になった瓶をその場に捨てて、一瞬の精神集中。

「ブリザードカレス」

杖から放たれる、青白い旋風。炸裂したその場所に、数人が凍り付いていることを横目で見るも一瞬、すぐさまレイジュは前へと進む。

氷像に群がる味方、その味方を倒すべくやってくる相手。レイジュはステップを繰り返しその更に横手に回り込むと、再びブリザードカレスを放った。

しかし、それは警戒されていたのであろう。ステップで回避されたそれはそのままに、レイジュは少し後退する。流石に味方から離れすぎた。

「レイジュ！ ナイスカレス！」

「まだまだ、押し返しますよ！」

「そうそう、ここからが本番よ！」

アモにかけられた声に、若干の高ぶった声で返す。ようやく前線にたどり着いたフィーも加わって、レイジュと『ルキフェル』のメンバーたちは各々詠唱やエンダーをかけ直す。

「つと：フィーさん、東側の林の中、敵オベリスク方向からハイド2接近中です」

「了解、そっちは一旦塞ぐわ」

とん、と軽くステップを踏んで、フィーは一呼吸で杖を収め、魔道具を出す。（※1）

「グラビティフィールド！」

唐突に生じた薄墨色の場が、その内にいる者たちを捕らえる。高重力の場に足を止められた2人のハイドが姿を現した。

「お帰りいただきましょうか」

「そうね。レイジュちゃん左に出てきたのお願い。アモ君、アイマ

ール君、ナディール君、狙って！ 他は前線維持！」

指示を出すと同時に、再びステップして杖に持ち替える。

「2・1：今！」

薄墨の場が消失した、その瞬間：

「「ブリザードカレス！」」

僅かにタイミングをずらしながら重なる、フィーとレイジュの声。消失した場と、その僅かに左側に並んで放たれたブリザードカレスが、2体のスカウトを凍らせる。

「手前バッシュいくぜ！」

待ち構えていたアモが、凍ったスカウトの片方を盾で殴りつける。
「いくぞ！」

ストライクスマッシュで一瞬にして距離を詰めたナディールが、自由を失ったスカウトにヘビースマッシュを浴びせる。

一瞬の後、2体の間に踊りこんだアイマールが、その中心で大剣を旋回させる。ソードランページ：まともにそれを浴びたスカウトの片方が、その場に倒れ伏した。

「1体逃がしたッ！！」

「そっちはいいわ、前線行って！」

フィーの指示が飛ぶ前に、レイジュは駆け出していた。

ひっきりなしに降り注ぐ矢の雨を、あるいはかわし、あるいは受けながら、回り込みつつ最前線を目指す。

直前に飲んだハイリジェネレートの効果で、矢傷は受ける傍から治っていくものの、少しずつダメージは蓄積している。

その時だった。

「邪魔な子って、アナタかしらねえ！？」

ざらりと背筋を撫で上げられるような、女の声がした。

「いっちゃいなさいなあ：ジャツジメントレイ」

「メテオインパクト！」

「何：きやあっ！！」

暴雨のごとく降り注ぐ雷と、炎を纏った隕石。追い討ちと追撃を拒むように降り注ぐ矢の雨。

よろよると身を起こしたレイジュは、薄汚れた服の裾を捌き、視線を走らせた。

「レイジュちゃん!？」

「私は大丈夫、だから…ッ!？」

言葉は、途中で途切れた。

「逃がしてあげない…サンダーボルトお！」

足元で炸裂する雷。衝撃で、レイジュは敵陣方向に弾き飛ばされる。空中に留まるのは一瞬。その間に、レイジュは回りに視線を走らせた。

自軍は停滞中、レイスは前線にはまだ着いていない。自らの落ちる場所は、おおよそ敵最前線。そして、現在の残り体力…

導き出されるのは、残酷な結論。

(やっぱりまだ、死ぬのは苦手…)

地面に叩きつけられる感触、身を起こした、その一瞬後…レイジュの意識は、なすすべもなく暴力に飲み込まれた。(※2)

迷夢編9 目標戦・前半（後書き）

FEZを知っている人は、レイジュの陣営はデスパイア・マスク
SMA P攻撃側だと思って読んでいただけると、いっそう楽しめる
かと思います。

※1 持ち替えステップという技術。2種類以上の武器を使用する
人にとっては必須。

※2 全体通してのゲーム的な流れの説明。むしろゲームやっている
人向け。

1. 戦闘開始、『ルキフェル』メンバー、一斉にクリスタル採掘&
オベリスク建築。レイジュがメンバーの中では最も遠くに建てに行
った（ゲーム内と言うところの「F・4」付近の裏オベを建築）

2. 展開一通り終了後、シシィを除いた全員が前線へ。レイジュは
ショートカットのため、中央を突っ切っていく。

3. 前線は弾幕が激しく、押せない状態。この時点で敵召喚0、自
軍ナイト1＋準備中1、レイス準備中。

レイジュ、横手崖上の死角（「D・5」付近）で詠唱かけ直し、
前線目前（「C・6」橋付近）でハイパワーポットを飲む。

4. 前線更に後退、レイジュのいる場所の真横あたり（「C・6」
「C・7」あたり）が最前線に。レイジュ横から突っ込み、敵最
前線にカレス。

5. 敵前線が止まったことにより、自軍が反転する。レイジュは凍

った相手を助けに来る敵を狙い、もう1回カレス。ただしこれはかわされる。

6. レイジュ一旦後退、味方最前線へ。ここでフィー合流。『ルキフェル』構成、氷2（氷雷1、氷重1）、片手1、妨害短+銃1、両手1、大剣2に。

7. レイジュ、ハイド発見。短1大剣1を前線にやり、残りでハイドを潰す。

8. ハイド処理完了。レイジュは一足先に前線へ行くも、不意打ちでジャツジとメテオを食らう。

そのままサンボルで敵陣側に釣られる。

9. 悪あがきする暇も与えられず、レイジュ1デッド。

迷夢編10 目標戦・後半

ふと、レイジュは目を開ける。そこはもうキープの前だった。

「…ちッ」

らしくない舌打ちの音が漏れる。再び杖を手に取り出そうとして…その表情が凍った。小さく震える手。取り落としそうになる杖を両手で支え、そのまま抱きしめるように胸に抱く。そのまま、首元のキープリンククリスタルに触れた。

「フィーさん・・・ごめんなさい」

『大丈夫よ、今のはしかたないわ』

「いえ、そうではなく…武器の耐久度が限界だったようです。もう一度の前線に耐えられそうにないので、私は裏に回ります」

遠くからころろと落ちてくるような、無機質で押し殺した声が、フィーの耳に届けられる。

『えっ！？』

それきり、声がパーティに届かないように切り替え、キープから遠く離れたクリスタルに向けて歩きだした。

「ちょっと、レイジュちゃん！？ …ああもう！ 全員、あたしはここから氷皿に徹するわ！ そのつもりでお願い」

「了解した」

「まあでもお、耐久は仕方ないわよ」

「それじゃなくて…って、言ってる暇ないわね。前線押されてきたわ。一時撤退、体勢立て直して反転かけるわよ！ ハイドサーチ忘れずにね。撤退ピアもお願い！」

いいながら、フィーも残り体力を考えてハイリジエネレートを飲む。

「全員、生存最優先！ レイス来るまで撤退しつつ耐えるわよ！」
主戦は今戦いの様相を変えていた。

一方、僻地は静かなものであった。歩く道すがら裏オベの見回りもしてみるが、傷ついた様子はない。

少し安心したようにレイジュは息を吐く。と、その手から杖がこぼれ落ちた。

「あ…」

すぐに拾おうと身を屈め…しかし、杖に触れた指先はすぐに引かれた。不満そうな顔で、何度か両手を握っては開く。そして、僅かに眉を顰めると、手に着けたハンドスキンを取り払った。

「ああ、やっぱり…」

レイジュは諦めたように呟く。

その両の手に巻かれたのは、元は純白であっただろう包帯。その中心には、痛々しい赤が鮮やかに広がっていた。

「傷口、開いちゃったか」

手を動かしたことによって緩み、もはやその役目を果たしていない包帯を取り払う。手の甲に真一文字に走るのは、じくじくと血を滲ませる傷口。その手をそのまま清らかな川に突っ込んで、傷口を洗う。僅かに顰められた眉がその痛みを示していたが、表情はほとんど変わらなかった。

川の水の中に一筋、薄紅の線が混じる。辺りに漂う仄かな鉄錆の匂いが薄れ消えるころ、レイジュは川から手を出した。清潔な布で手と傷口を拭い、傷薬をつけたガーゼを当てて包帯で巻いていく。両手共に手当てを終えると、再びハンドスキンをつけて立ち上がった。

「さて…けしかけた手前、真面目に裏方しないとね」

少し早足で僻地クリスタルに向かう。

戦争はまだ、終わらない。

僻地クリスタルには先客がいた。

ひとりぽつんとクリスタルを掘る彼女は、寂しそだった顔にぱつと笑みを浮かべて言った。

「やつと誰か来てくれたあ」

それは、あまりにも戦場に似合わない、おっとりとした笑みであった。

シアネット・レイテルパッシュと名乗った彼女は、おおそレイジュと同じ歳か、少し上くらいであろう。同じ銀髪と赤瞳でありながら、その纏う雰囲気はレイジュとは全く違う。ふわふわおっとり、周りに花でも飛ばせているかのような雰囲気。シアネットは、緊張感をどこかに置き忘れたようにも見える。細い刺突剣がまるでアクセサリーのようだ、とレイジュは思った。

「…フエンサー、ですか」 (※1)

「まだ全然下手なだけだねー。でもでも、はっせーは…あ、はっせーはあたしの友達でね、一緒に戦争来たんだよ！ えっと…本名…何だっけ？ いつも『はっせー』って呼んでるからなあ…とにかくねっ！ はっせーはすごく強いフエンサーなんだよっ！！」

「……」

レイジュは無言で紙を差し出す。それは、事前に貰っていた自軍と敵軍の構成一覧表。その中からフエンサーを選び、シアネットの言う『はっせー』らしき人物を目で探り、一つの名前を指した。

「響きからして、この方ですか？」

指し示した名前は、『ハーシェ・リーフ』。かなり無理をすれば、はっせーと読めなくもないだろう。数少ないフエンサーの中で、それらしき名を持つのは彼女だけだった。

「あ、そうそうー！ れーちゃん凄い！」

「……私の名前は、レイジュですけど…」

「うん、だから『れーちゃん』！」

満面の笑顔で言い切られ、レイジュは、こらえきれずに溜息をついた。どうやら『はっせー』ことハーシェ嬢も、シアネットの妙な

あだ名センスの被害者のようだ。

レイジュは、まだ見ぬハーシェ嬢に密かに同情した。

と。レイジュの目がずっと細められる。

立ち上がると同時に詠唱をかけ、杖をしっかりと握り直す。

「どうしたのー？」

「…来ます。もう少し、距離はあるけれど…」

視線は回りを警戒したまま、キープリンククリスタルから漏れる声に耳を傾け、戦況を読み取っていく。

「前線はこちらが優勢、レイスも健在のようですね。双方残存戦力は互角…ややこちらが有利ですか。前線はこちらが有利なこの状況で、考えられるのは…」

すつ、と、レイジュの杖が動く。軌跡にそって生じる冷気が急速に膨れ上がり、弾けた。

アイスボルト…瞬間、その冷気を叩きつけられたスカウトが姿を現す。四肢を縛る冷気が、そのスカウトから機敏な動きを奪っていた。

「オベリスク破壊のため、僻地への『ねずみ』侵入！」（※2）

続いて杖を振るうと、天から小さな雷が落ちる。ライトニング1発のダメージは小さいが、複数発当てればいいだけのこと。

しかし…ふと一瞬だけ視線をずらすと、レイジュはライトニングを止めた。

続いて放たれるのは、氷結の魔術・アイスジャベリン。氷の内に閉じ込められて、スカウトの足が止まる。そして…

「シアネットさん！」

「フィニッシュ…スラストっ！！」

振りぬかれた刺突剣が、凍りついたスカウトを薙ぐ。次の瞬間、地面に倒れ伏したスカウトは、その体を透けさせていた。

「お見事です」

「あたしだって、これくらいはできるもの！」

お互いに健闘を称えるように笑うも、レイジュは即座に表情を引き締めた。

「…先遣は潰せましたが、本隊が来ますね。集団ねずみとは、やっかいな…」

「複数かあ…ちょっと苦手」

フェンサーはその特性上、対少数には強いが多数相手には弱い。

「承知しております」

言いつつ、レイジュは周りを見回した。

背後にはオベリスク。ここで食い止め切れなかった場合、恐らく3本は折られるであろう。相手は部隊ではないようだが、最低でも5人を視認した。

レイジュは息をつく。そして…覚悟を決めた。

「シアネットさん、増援を呼んできて下さい」

「え！？ れーちゃんは？」

「ここに残って、時間を稼ぎます」

言って、杖を握り直す。痛みと失血で震える腕を押さえ、予備の包帯で手と杖を縛りつけた。これで、アームブレイクを食らわない限り、杖を落とすことはない。

「無茶だよお！！ あたしも残って…」

「無茶ですよ。でも、私は一応氷皿です。足止めや時間稼ぎは得意分野です。みすみすここで二人とも死ぬことはできません、僅差なのですから」

「ならあたしが…」

「失礼ですが、フェンサーが足止めに向くとでも？」

シアネットは口を閉ざす。悔しそうな瞳は、それでももの言いたげに揺れていた。

レイジュは小さく笑い、自分よりも頭半分高い相手を撫でつつ、採掘したクリスタルを手渡した。

「重要な役目なんですよ？ 私が生きるか死ぬかは、あなたがいか
に速く援軍を呼んでくれるかにかかってるんですから」

シアネットは、一瞬迷ったようだった。しかし、揺れる瞳は一瞬
後、決意を秘めたものになる。

「わかった：死んじゃだめだよ、れーちゃん」

「あなたこそ」

顔の横に掲げた手に、ぱし、とシアネットの手が打ち合わされる。
痺れるような痛みはしかし、どこか心地よかった。

そのまま、二人は逆方向へ走り出す。レイジュは相手の侵入口へ、
シアネットはキープに向かって。

この場所の位置と、オベリスクの危機を全力で叫び続けるシアネ
ット。キープリンククリスタル越しに聞こえるその声に心強さを覚
えて、レイジュは詠唱をかけなおした。

迫る敵影。ハイドの存在。自らの体力。相手の構成。

レイジュのハイドサーチ能力は貴重だ、と、フィーは評した。し
かし、レイジュはハイドだけを見ているわけではない。

「自分を、相手を、地形を：全てを見て、動きなさい。一人の力は
小さくて、集団には敵わないけれど：そこに、必ずほころびはある」
呟いた言葉は呪文のように、レイジュの心を定めてくれる。

「そこに守るべきものがあるなら、目をそらしてはいけない。まず
は『見る』こと。それが、道を切り開く」

深紅の瞳を煌かせ、レイジュは広く世界を見つめた。

「増援が来るまで：ここは抜かせません！」

掲げる杖に集まる魔力。杖と体を軋ませて、今、守るための戦い
が始まった。

(※3)

迷夢編10 目標戦・後半（後書き）

※1 フェンサーは、回避能力が高く、特に少数戦で力を発揮するクラス。

反対に多対多は苦手で、主戦でいまいち必要とされない。また、対建築能力が全クラス中最低で、建築物を壊すことはまず不可能。

※2 「ねずみ」とは、裏オベリスクを破壊するために敵陣に潜入する敵のことを言う。一人のときもあるが、複数人のときもある。

ねずみとしてよくある職は、

・ 姿を隠す「ハイド」のスキルを持ち、対建築能力も低くない短剣スカウト

・ 対建築能力が高く、移動スキルを持ち移動・逃走に長けた両手ウォリアー・セスタス

※3 この話全体通してのゲーム的な流れの説明。ゲームやっている人向け。

1. レイジュ、キープに死に戻る。この際杖の耐久がぎりぎりであることに気付き、その旨を告げ前線を自粛。裏方へ回る。

この間に前線は一旦押されるも、レイス到着によって巻き返す。フィーは重力を封印して氷皿に徹し、アレイス（短中心ハイブリ。Lv40・スキルはハイド3アム2ヴォイド3ピア1。モーションの小ささから銃ピア）は撤退時ピア、拮抗し始めたら短剣で妨害に。

2. 僻地クリスタルに到着。先にいたシアネット共にクリスタル採掘開始。

（シアネットはフェンサーLv23。スキルはフィニ3タンブル3）

3. クリスタル採掘中ハイドサーチをしていたレイジュがハイドを発見する。IBで暴き、ライトを連打して距離を空けつつ削る。

4. シアネットが相手進行方向に回り込んでいることに気づき、レイジュは削りをやめてジャベで相手の動きを止める。

5. シアネット、凍ったスカウトにフィニ。ここまでで削られていたスカウトに止めを刺す。

6. レイジュ、フアークリ最大にてサーチ再開。遠くに複数の敵影を認める。

（倒したスカウトがこちらの構成とLvを報告していたため、僻地にオベ折りに来た）

7. レイジュが一人残り敵を足止め、シアネットが援軍要請に行く。
（二人とも救援要請マクロを組んでいなかった）

最後に、シアネットの名前を貸してくれた友人N、そしてハーシエの名前を考えてくださったHさんに感謝を。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5868/>

ファンタジーアース異聞 ～凍風のレイジュ～

2010年10月8日14時12分発行